

ひこいち さかな

# 「彦一と魚」

彦一のおっかさんは働はたらき者もので、信心しんじんのあついひとやった。

鎮守ちんじゆの森もりをねぐらにするカラスのうちのいちわ一羽どりが、ひな鳥どりのとき、

母カラスははに捨すてられたのか、彦一いえの家の庭にわさきで悲かなしそうに鳴ない

ていたんや。彦一のおっかさんは、まだ飛とぶこともできんカラスの

ひなに、餌えさをやり、水みづを飲のましてだいじに育そだて、飛とぶようになる

と、鎮守ちんじゆの森もりへ逃にがしてやったんや。

それから半年はんごしほどして、彦一のおっかさんは、ふとした病びょうき気に

かかって、あつというまに死しんでしもうた。

それから一年いちねんほどたって、あたらしいおっかさんがきた。

あたらしいおっかさんは、はじめのうちこそ、彦一、彦一とかわい

がってくれたんやが、弟わとうとが産うまれると、とたんに弟わとうとのほうを

かわいがって、なにかにつけて彦一をうとんじるようになったんや。

弟わとうとが大きくなると、お菜かすまでちかすごうてきたんやな。魚さかなのとき

など、いちばんようわかった。弟わとうとのは、いつも骨ほねのない真まんなか中なかばかり。

それにひきかえ、彦一のほうは、頭あたまとかしっぽで、そのつど、なさけないおもいをしておった。

ある日、彦一は、ひとり小川おがわで魚を取って遊あそんでいたんや。

するとな、鎮守の森のほうから一羽のカラスが飛んできて、

彦一が取った魚をつきだしたんや。

彦一は、生きいものをかわいがった死んだおっかさんのことおもを思い、おこりもせずに、だまって見みていたんや。

カラスはフナの頭をつくと、「カーシラ、カーシラ」、ついで、しっぽをつくと、「オーサン、オーサン」と鳴なくのやった。

それから四し、五日ごあとの夕餉ゆうげどきかやった。

魚のお菜かずで、おっかさんは自分が産んだ弟に、いつものように真ん中をやり、彦一にあたまをやったんや。

このとき彦一は、つい、このあいだの、カラスの鳴き声をおもいだしてな、こう言うた。

「おっかさん。あたまを食くわんと、人の頭かしらに立たつことはできんそうや」

うまそうに食う彦一を見て、ままはは継母は、これではいかんと、つぎのときはしっぽのほうをやったんやな、それも彦一はよろこんだ。

「おっかさん。おうさま王様にあやかるとは、魚の尾をお食わんと  
いかんそ、うや」

継母は彦一の頭あたまのよいにはかなわぬと、それから、なんでも  
びょうどう平等にしたそ、うや。

彦一はさっそく鎮守の森へ行き、

「カラスよ、おおきに」

と大きな声で礼をいうた。

そしてな、彦一は、自分じぶんにちからをかしてくれたのは、  
死んだおっかあが育てたカラスにちがいない、と思うたもんやった。

「新版」日本の民話シリーズ74巻『近江の民話』

未来社  
2017年より